報告 広島県支部医業経営セミナーに地域経済誌が注目

畑埜　義雄 氏

当協会広島県支部は、2007 年度より広報活動の一環として毎年、医療機関関係者を対象に医業経営セミナーを開催しており、本年も 3 月 26 日（木）に「平成 26 年度医業経営セミナー」を広島クリスタルプラザで開催した。

講演は第一部「医療人のやりがいをもたらすコーチング流チームマネジメント」（和歌山県立医科大学附属病院元院長・同大名誉教授、畑埜クロスマネジメント代表 畑埜義雄氏）と第二部「広島県の医療政策の現状と今後の展望等」（広島県健康福祉局医療政策課課長 坂上隆士氏）の 2 題。

畑埜氏は麻酔科医として医療に携わってきた経験から「医療人のやりがいをもたらすコーチング流マネジメント」を解説した。医療とは多くの専門職がチームとして患者にかかわるにもかかわらず、いまだに医師の一部はパターナリズムから抜けきれず、すべての職種が医師の指示・命令の下、治療のために行動すべきと考えている。これはかつて、ICU が日本に導入されたとき Care（医療）を Cure（治療）と誤訳したことに端を発すると指摘。これでは治療人（医師）以外は“やりがい”を見いだすことはできない。しかし、チーム医療は治療とケアが対等で、相互に補完し合うもの。チーム力を向上させるには人材開発技法の 1 つであるコーチングの採用が有効、などとアドバイスした。

当日は地元広島の経済レポート社が取材に訪れ、畑埜氏の講演が記事にまとめられた（下記参照）。これは当協会広島県支部の活動が充実してきたことの証左といえる。われわれ医業経営コンサルタントの活動内容を医療機関関係者のみならず広く国民に啓発していく方法としても効果的であることから、他支部でも参考にしていただければ幸いである。　　（本部広報委員　藤井 康彦）

経済レポート

4/7

Everything Happens for the Best!

セミナーの様子は「経済レポート」（4 月 7 日号）に取り上げられた

コーチング技法を採用
チーム力向上に実績

（公社）日本医業経営コンサルタント協会広島県支部（藤鬼洋次支部長）は、先月二十六日に「平成26年度医業経営セミナー」を広島クリスタルプラザ三階で開催した。

二部構成の第一部は、和歌山県立医科大学付属病院元病院長で畑埜クロスマネジメントの畑埜義雄代表が「医療人のやりがいをもたらすコーチング流チームマネジメント」を講演。畑埜氏は長年麻酔科医として医療に関わり、自身の経験を基に「リーダーとは？マネジメントとは？」を解説した。以下要約。

医療現場は専門職の集まりにも関わらず未だ“医療とは治療すること”であり、全ての職種が治療人（医師）の指示・命令のもと行動する”というパターナリズムが維持されている。これでは治療人以外は“やりがい感”は持てない。チーム医療の真髄は治療とケアが同等であるべきで、医師をはじめチーム全員がお互いに「自分の足りないところを誰かが補完してくれている」という謙虚さを持つことが重要。こうした意識を育ませ、チーム全員に“やりがい感”の創出とチーム力を向上させるため「コーチング」を採り入れる。

コーチングとは、対話によって相手の自己表現や目標達成を図る技術で、相手の話をよく聴き（傾聴）、感じたことを伝えて承認し、質問することで自発的な行動を促す。傾聴は、うなずいたり繰り返したりして安心感を与え、質問はWhatとHowを使う。※Whyは禁句。承認は褒めること。これら一連の行動を続けることで、コミュニケーションが図れ、各人のモチベーションが高まり、チーム力が向上する。

チームを率いるリーダーの資質も大きなカギを握る。リーダーとは、まず自分を知ること。どのような価値観を持っているか、自分を明確に表現できるか、ぶれることなく自分の意思決定ができるか、思考・行動のパターンを見える化できるか。これを常に問い続け、考え抜くことで自らのビジョンが描ける。それをチーム内に「これで良いだろうか？」と巻き込む。他者からのフィードバックは、さらなる成長の糧となる。

講演後には参加者を対象に簡単なコーチングを実践した＝写真＝。三人組（A・B・C）になり、まずBがAに自慢話をする。Aはそれをしっかりと傾聴。次にAがBに自慢話をするが、Bは別のことを考えて傾聴しない。次にCがAとBにビジョンや目標を熱弁する。最後はAとBがCを褒めちぎる。時間にしてわずか二十分程度だが、話す内容、聞く態度、褒め言葉などの大切さを実感できる機会となった。講演は医療現場が対象だったが、一般企業や団体にも大いに参考になる技法と感じた。